

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

——『満洲通信』の広告を通じて——

岡 部 芳 彦

神戸学院経済学論集

第52巻 第1・2号 抜刷

令和2年9月発行

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

——『満洲通信』の広告を通じて——

岡 部 芳 彦

要約

1932年から37年までハルビンで発行されていたウクライナ語の週間新聞『満洲通信』の広告の分析からは、同紙がハルビンのウクライナ人の中でコミュニティ紙として機能する一方で、ウクライナ・ナショナリズムの高まりの中で揺れ動くウクライナ人社会や商工業者の実態が浮かび上がってきた。

『満洲通信』に最も多くの広告を掲載したС・Д・Т. タラセンコ商会の広告はロシア語であり、『満洲通信』への広告掲載はたんなる商業的な意図のみであったかもしれない。一方、商業広告再開以後は最も早く広告を掲載した事業者でもあり、『満洲通信』に対して好意的であったのは間違いない。このようなタラセンコの立ち位置は、当時のハルビンのウクライナ人の中では一般的であったのかもしれない。

1 はじめに

ハルビンで発行されていたウクライナ語の週刊新聞『満洲通信』にはさまざまな商業広告が掲載されている。本稿の目的は、その分析を通じて、ハルビンのウクライナ人社会と商業活動の実態を解明することである。

ハルビンのウクライナ人の商業活動の実態について、先行研究は存在しない。一番の理由は、これまで白系ロシア人とウクライナ人を分けて研究されること自体がなかったためである。一方、白系ロシア人の研究の中でハルビンのウクライナ商人が取り上げられることはあった。例えば、『満洲通信』に商業者として最も多くの広告を掲載したセルゲイ・ドミトリエヴィッチ・タラセンコについては、これまで神戸の「モロゾフ」に関する評伝や研究でも取り上げられ

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

てきた。神戸モロゾフ製菓の発展の礎を築いたヴァレンティン・フォードロヴィチ・モロゾフ（以下V・F・モロゾフ）がタラセンコの娘オリガと結婚したことやタラセンコがハルビンで商業活動を展開したことは、研究だけではなく、モロゾフ家を巡るファミリーヒストリーでもたびたび語られてきた。⁽¹⁾一方、ハルビンでの商売の実態について、具体的には何も分かっていない。

ロシア人やロシア・ファシスト党の影響も強かった満洲国のハルビンにおいて、ウクライナ語で刊行された『満洲通信』は、ウクライナ・ナショナリズムの傾向が強かった。編集者のイヴァン・スヴィットもウクライナ人としての民族意識が高かった。本稿では、その『満洲通信』に、どのような事業者が広告を掲載し、またいかなる内容であったのかを見てみたい。そして『満洲通信』の発行期間を通じた広告の傾向を検討することで、ハルビンのウクライナ人社会や商工業者の実態にくわえて、彼らがどのようなメンタリティーを持っていたのかにも迫りたい。

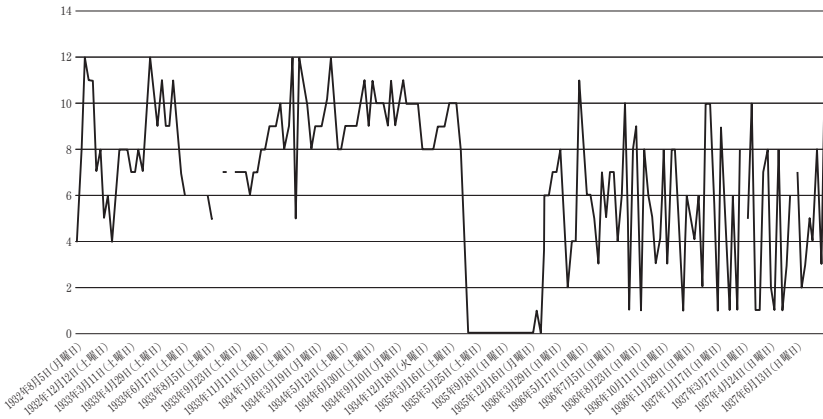
2 『満洲通信』の商業広告

図1は『満洲通信』の各号に掲載された広告数をまとめたものである。作成にあたっては、新年と復活祭を祝う1面広告は、ハルビンのウクライナ系各種団体も掲載するために省き、主に商業広告のみを数えた。また空白は欠号（6号分）である。

そこから分かるのは1932年創刊直後こそ、少ないもののそこから安定的に広告が掲載されるようになったことである。ところが1935年4月あたりから急激に落ち込み、1936年4月にかけてはほぼゼロの状態が続いている。理由は分からないが、商業広告自体が全く掲載されていないので、『満洲通信』側の編集

(1) ポダルコ・ピョートル『白系ロシア人とニッポン』成文社、2010年。川又一英『大正十五年の聖バレンタイン日本でチョコレートをつくったV・F・モロゾフ物語』PHP出版、1984年、川又一英『コスモポリタン物語』コスモポリタン製菓、1990年、佐和みずえ『チョコレート物語：一粒のおくり物を伝えた男』くもん出版、2018年。

図1 『満洲通信』の商業広告数



出典：『満洲通信』通算番号1号～200号（欠号：37号，38号，41号，179号，183号，192号）。
 ※商業広告数には、ウクライナ人居留民会と医療関係者は含めていない。また毎号、『満洲通信』の広告も掲載されているが含めていない。

方針であったと推測される。また、ちょうど同時期のハルビンではウクライナ人居留民会設立を中心に、ウクライナ・ナショナリズムが高まりを見せる時期であった。同会設立の際は、ウクライナ独立派と帝政ロシア復興派が、組織の方針を巡って対立し、不安定な運営が続いた。そのような政治状況が、ハルビンのウクライナ商人や関係者から敬遠されたとも考えられる。

表1は、『満洲通信』各号の広告数と業者・業種別広告掲載状況をまとめたものである。各種広告の中から1932年の創刊当初から掲載したタラセンコ商会、ベールィ社交ダンス教室、ボナベティ商店&カフェの3業者にくわえて映画、ウクライナ人居留民会も取り上げた。その他に医療関係の広告数を医者・歯科医・薬局ごとに数えた。

ベールィ社交ダンス教室は1933年9月16日号まで39広告、ボナベティ商店&カフェは1934年11月13日まで87広告を掲載し、『満洲通信』発行期間前半では

(2) 満洲帝国外交部編「満洲に於けるウクライナ人」、68頁。

図2 ボナペティ商店&カフェの広告

МАГАЗИН И КАФЕ
Т-ва БОН-АППЕТИТ
КИТАЙСКАЯ № 208-206.
ОБРАТИТЕ ВНИМАНИЕ!

НАШЕ ПРЕДПРИЯТИЕ НЕ БЫЛО ЗАТОПЛЕНО, а потому БАЦИЛЛЫ и БАКТЕРИИ АБСОЛЮТНО ОТСУТСТВУЮТ, что важно при существующей эпидемии. Все отдѣлы и служащие находятся ПОД СТРОГИМ НАДЗОРОМ Д-ра ДЖИШКАРИАНИ, поэтому вездѣ царит чистота.

Кулинарный отдѣл и кухня находятся под руководством известнаго шефкулинара **И. И. ПУЛИКОВА.**

ОТПУСКАЮТСЯ ОБЪЕМЫ и УЖИНЫ. ЦѢНЫ нормальныя.
Играет первоклассная электрола.

出典：『満洲通信』2号，1932年8月19日，8面。

図3 ベールィ社交ダンス教室の広告

Н. А. Бѣлый
Студия награждена дипломом от студий Императорскаго С. Петербургскаго Театрального училища профессора Н. Л. Гавликовскаго. Существует в Харбинѣ с 1903 года. Зарегистрирована в ДНП.

Мазурка, вальс и др. рус. и европейскіе танцы.
Фокстрот, вальс, блюз, танго.

НОВЫЙ ГОРОД. Большой проспект. № 40 уг. Гириной. Прием от 9 утра до 10 вечера.

Совершенно неумѣющие тонцевать выучиваются в 4-5 уроков. Плата значительно понижена.

出典：『満洲通信』3号，1932年8月19日，8面。

この3業者が最も掲載数が多い。ベールィ社交ダンス教室を主催したH・ベールィは、満洲国外交部編「満洲に於けるウクライナ人」の中でハルビンのウクライナ人居留民会の指導部の一人で挙げられ、「ハルビンにおいてウクライナ獨立派として有名」⁽³⁾であり、「財政的に完全に獨立」⁽³⁾していた。一方、自身の広告では「サンクトペテルブルクのガブリコフスキー（Н. Л. Гавликовский）⁽⁴⁾教授」の免許皆伝を謳っていた。ロシアとの繋がりを強調していることから、ときにハルビンのロシア人社会に批判的であった『満洲通信』であったが、その商業広告に関しては政治性はあまりなかったと考えられる。また、大半の広告がロシア語であった。

一方、ウクライナ語の広告を掲載したのは、山東半島産葡萄によるワイン製造を行っていたB.C. オパードチ・ワイン店である。「自前の貯蔵庫で五年間寝かした山東半島産葡萄のワインです」と書かれている。ワインボトルのラベルを連想させる広告のデザインは、ウクライナの国章トルィーズブ（三叉戟）が使用されており、ウクライナ人としての民族意識が強く感じられる。

ウクライナ人居留民会の広告であるが、25回のみ掲載し、その大半は、1936年1月から7月までの半年間に集中している。1936年1月からの商業広告が再開された直後から始まっているため、商業者ではないウクライナ人居留民会による広告掲載は、広告収入が途絶えていた『満洲通信』への財政的支援策の意味合いがあったと思われる。

医療関係の広告は、創刊当初より1935年4月から商業広告が途切れる前まで全号に掲載されている。医師1～5人、歯科医1～3人、薬局1～2人で推移している。治療の際、言葉が通じる医師のほうがよく、『満洲通信』にその情報が掲載されていたことから、ハルビンのウクライナ人の中でコミュニティー

(3) 岡部芳彦「満州における〈ウクライナ運動〉：忘却された日本-ウクライナ関係史」『アリーナ』20号、152頁。

(4) Гавликовский, Николай Людвигович (1868年～1922年前後). バレエダンサー、舞台監督. ロシア国立図書館ウェブサイト (URL <https://search.rsl.ru/ru/record/01003644831> 最終閲覧日2020年6月13日).

図4 В.С. オパードチ・ワイン店の広告



出典：『満洲通信』3号，1933年2月18日，4面。

紙として機能していたことが分かる。

商業広告再開後の全号に掲載されたのは映画広告である。ハルビンのウクライナ人に向け民族意識の高い紙面づくりであった『満洲通信』だが、この時期には娯楽性も必要とされたことが窺える。

日系と思われる商業広告は一業者だけである。日東紅茶を扱った Такаока и Ко 商会である。所在地はスコーズナヤ（透龍街）4番地で、『哈爾濱商工名録』を確認したところ、「日東紅茶，綿花，建築材料，清酒，穀物輸出」を

図5 Такаока и Ко 商会（株式会社高岡號）の広告

Пейте и требуйте вездѣ
свѣжій байховый



ЧАЙ

с собственной плантаци
„МИЦУЙ“

Вкусный, ароматный и крѣпкій настой 2-х сортов.

Пейте чай „НИТТО“.

РОЗНИЧНАЯ ЦѢНА:

<p>1 сорт в желт. упаковкѣ (1 ф. 9 зол. имѣет вѣс).</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">1 паунд 2.30 дол.</td> <td style="width: 50%;">1 паунд 3.00 дол.</td> </tr> <tr> <td>1/2 " 1.20 "</td> <td>1/2 " 1.80 "</td> </tr> <tr> <td>1/4 " 0.65 "</td> <td>1/4 " 0.90 "</td> </tr> </table>	1 паунд 2.30 дол.	1 паунд 3.00 дол.	1/2 " 1.20 "	1/2 " 1.80 "	1/4 " 0.65 "	1/4 " 0.90 "	<p>Высшій сорт в зелен. упаковкѣ</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%;">1 паунд 2.30 дол.</td> <td style="width: 50%;">1 паунд 3.00 дол.</td> </tr> <tr> <td>1/2 " 1.20 "</td> <td>1/2 " 1.80 "</td> </tr> <tr> <td>1/4 " 0.65 "</td> <td>1/4 " 0.90 "</td> </tr> </table>	1 паунд 2.30 дол.	1 паунд 3.00 дол.	1/2 " 1.20 "	1/2 " 1.80 "	1/4 " 0.65 "	1/4 " 0.90 "
1 паунд 2.30 дол.	1 паунд 3.00 дол.												
1/2 " 1.20 "	1/2 " 1.80 "												
1/4 " 0.65 "	1/4 " 0.90 "												
1 паунд 2.30 дол.	1 паунд 3.00 дол.												
1/2 " 1.20 "	1/2 " 1.80 "												
1/4 " 0.65 "	1/4 " 0.90 "												

Агентство для С. Мавъжурин „Мицуй Бусан Кайша“
Водопроводная, № 23.

Оптовая продажа: Т. Д. Такаока и К-о

Склад: Харбин-Пристань, Сквозная № 4, тел. 40-70 и 21-70

出典：『満洲通信』21号（30号），1933年6月24日，4面。

行った株式会社高岡號であつた。⁽⁵⁾社長の相見幸八は資江製綿配給代理店組合の
理事長を務める有力者である。⁽⁶⁾相見は京都府出身で、年少のころ対露貿易で成
功を収めていた伯父の谷源蔵に伴ってウラジオストクに行き、対露貿易に従事
した。1933年末には、ハルビンに4階建約2300坪、55戸のテナントが入る近代
的な高岡ビルを建て、「日本人の誇り」と称された。⁽⁷⁾株式会社高岡號の業態は

(5) 哈爾濱商工公会調査科編『康徳6年度哈爾濱商工名録』（哈爾濱商工公会，1939），p. 13.

(6) 哈爾濱商工公会調査科編『康徳8年度哈爾濱商工名録』（哈爾濱商工公会，1941），p. 133.

(7) 「国際的に發展する大哈爾濱特別市」『大阪朝日新聞』1934年4月28日．神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫都市（12-109）（URL: <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/>）

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

卸売りであり、『満洲通信』への広告掲載は、ウクライナ系商人との取引を意図していたとも思われる。

次章では、『満洲通信』に商業者では最も多くの広告を掲載したC・D・タラセンコ商会について見てみたい。

表1 『満洲通信』各号の広告数ならびに業者・業種別広告掲載状況

号数	発行日	商業広告数	タラセンコ商会	ペールィ社交ダンス教室	ボナベティ商店&カフェ	映画広告	ウクライナ人居留民会	医療関係の広告 (医師/歯科医/薬局)
1号	1932年8月5日 (月曜日)	4		○	○			1/0/0
2号	1932年8月12日 (月曜日)	7		○	○			1/0/0
3号	1932年8月19日 (月曜日)	12	○	○	○			2/0/0
4号	1932年9月27日 (月曜日)	11	○	○	○			3/1/1
5号	1932年10月7日 (金曜日)	11	○	○	○			3/1/1
6号	1932年10月15日 (土曜日)	7	○	○	○			4/1/0
7号	1932年10月22日 (土曜日)	8	○	○	○			4/1/1
8号	1932年12月12日 (土曜日)	5	○	○	○			4/1/1
9号	1932年12月19日 (土曜日)	6	○	○	○			4/1/1
1号	1933年1月(日付無, 土曜日)	4	○	○	○			5/1/1
2号	1933年2月11日 (土曜日)	6	○	○	○			5/1/1
3号	1933年2月18日 (土曜日)	8	○	○	○			5/1/1
4号	1933年2月25日 (土曜日)	8	○	○	○			5/1/1
5号 (14号)	1933年3月4日 (土曜日)	8	○	○	○			5/1/1
6号 (15号)	1933年3月11日 (土曜日)	7	○	○	○			5/1/1
7号 (16号)	1933年3月18日 (土曜日)	7	○	○	○			5/1/1

das/jsp/ja/ContentViewM.jsp?METAID=00749013&TYPE=IMAGE_FILE&POS=1
最終閲覧日：2020年6月15日).

8号 (17号)	1933年3月25日 (土曜日)	8	○	○	○		5/1/1
9号 (18号)	1933年4月1日 (土曜日)	7	○	○	○		5/1/1
10号 (19号)	1933年4月8日 (土曜日)	9	○	○	○		5/1/1
11号 (20号)	1933年4月16日 (土曜日)	12	○	○	○		5/1/1
12号 (21号)	1933年4月22日 (土曜日)	10	○	○	○		5/1/1
13号 (22号)	1933年4月29日 (土曜日)	9	○	○	○		5/1/1
14号 (23号)	1933年5月6日 (土曜日)	11	○	○	○		5/2/0
15号 (24号)	1933年5月13日 (土曜日)	9	○	○	○		5/2/0
16号 (25号)	1933年5月20日 (土曜日)	9	○	○	○		5/2/0
17号 (26号)	1933年5月25日 (木曜日)	11	○	○	○		5/2/0
18号 (27号)	1933年6月3日 (土曜日)	9	○	○	○		5/2/0
19号 (28号)	1933年6月10日 (土曜日)	7	○	○	○		5/2/0
20号 (29号)	1933年6月17日 (土曜日)	6	○	○	○		5/2/0
21号 (30号)	1933年6月24日 (土曜日)	6	○	○	○		5/2/0
22号 (31号)	1933年7月1日 (土曜日)	6	○	○	○		5/2/0
23号 (32号)	1933年7月8日 (土曜日)	6	○	○	○		5/2/0
24号 (33号)	1933年7月15日 (土曜日)	6	○	○	○		5/2/0
25号 (34号)	1933年7月22日 (土曜日)	6	○	○	○		5/2/0
26号 (35号)	1933年7月29日 (土曜日)	6	○	○	○		5/2/0
27号 (36号)	1933年8月5日 (土曜日)	5	○	○	○		5/3/1
30号 (39号)	1933年8月26日 (土曜日)	7	○	○	○		5/3/1
31号 (40号)	1933年9月2日 (土曜日)	7	○	○	○		5/3/1
33号 (42号)	1933年9月16日 (土曜日)	7	○	○	○		5/3/1
34号 (43号)	1933年9月23日 (土曜日)	7	○		○		5/3/1
35号 (44号)	1933年9月30日 (土曜日)	7	○		○		5/3/1

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

36号 (45号)	1933年10月7日 (土曜日)	7	○		○		5/3/1
37号 (46号)	1933年10月14日 (土曜日)	6	○		○		4/3/1
38号 (47号)	1933年10月21日 (土曜日)	7	○		○		4/3/1
39号 (48号)	1933年10月28日 (土曜日)	7	○		○		4/2/1
40号 (49号)	1933年11月4日 (土曜日)	8	○		○		4/2/1
41号 (50号)	1933年11月11日 (土曜日)	8	○		○		4/2/1
42号 (51号)	1933年11月18日 (土曜日)	9			○		4/2/1
43号 (52号)	1933年11月25日 (土曜日)	9			○		4/2/1
44号 (53号)	1933年12月5日 (火曜日)	9	○		○		4/2/1
45号 (54号)	1933年12月16日 (火曜日)	10	○		○		4/2/1
46号 (55号)	1933年12月23日 (土曜日)	8	○		○		4/2/1
47号 (56号)	1933年12月30日 (土曜日)	9	○		○		5/2/1
1号 (57号)	1934年1月6日 (土曜日)	12	○		○		5/2/1
2号 (58号)	1934年1月20日 (土曜日)	5	○		○		5/2/1
3号 (59号)	1934年1月27日 (土曜日)	12	○		○		5/2/1
4号 (60号)	1934年2月16日 (土曜日)	11	○		○		5/2/2
5号 (61号)	1934年2月24日 (土曜日)	10	○		○		5/2/2
6号 (62号)	1934年3月3日 (土曜日)	8	○		○		5/2/2
7号 (63号)	1934年3月10日 (土曜日)	9	○		○		5/2/2
8号 (64号)	1934年3月19日 (月曜日)	9	○		○		5/2/2
9号 (65号)	1934年3月26日 (月曜日)	9	○		○		5/2/2
10号 (66号)	1934年3月31日 (土曜日)	10	○		○		5/2/2
11号 (67号)	1934年4月7日 (日曜日)	12	○		○		5/2/2
12号 (68号)	1934年4月14日 (日曜日)	10	○		○		5/2/2
13号 (69号)	1934年4月23日 (月曜日)	8	○		○		5/2/2

14号 (70号)	1934年4月28日 (土曜日)	8	○		○		5/2/2
15号 (71号)	1934年5月12日 (土曜日)	9			○		5/2/2
16号 (72号)	1934年5月19日 (土曜日)	9			○		3/2/2
17号 (73号)	1934年5月26日 (土曜日)	9			○		3/2/2
18号 (74号)	1934年6月2日 (土曜日)	9			○		3/2/2
19号 (75号)	1934年6月9日 (土曜日)	10			○		3/2/2
20号 (76号)	1934年6月16日 (土曜日)	11			○		3/2/2
21号 (77号)	1934年6月23日 (土曜日)	9			○		3/2/2
22号 (78号)	1934年6月30日 (土曜日)	11			○		3/2/2
23号 (79号)	1934年7月7日 (土曜日)	10			○		3/2/2
24号 (80号)	1934年7月14日 (土曜日)	10			○		3/2/2
25号 (81号)	1934年7月28日 (土曜日)	10			○		3/2/2
26号 (82号)	1934年8月6日 (月曜日)	9			○		3/2/2
27号 (83号)	1934年8月11日 (土曜日)	11			○		3/2/2
28号 (84号)	1934年8月27日 (土曜日)	9			○		3/2/2
29号 (85号)	1934年9月10日 (月曜日)	10			○		3/2/2
30号 (86号)	1934年9月17日 (月曜日)	11			○		3/2/1
31号 (87号)	1934年9月29日 (土曜日)	10			○		3/2/1
32号 (88号)	1934年10月13日 (土曜日)	10			○		3/2/1
33号 (89号)	1934年10月22日 (月曜日)	10			○		3/2/1
34号 (90号)	1934年11月13日 (火曜日)	10			○		3/2/1
35号 (91号)	1934年12月8日 (土曜日)	8					3/2/1
36号 (92号)	1934年12月18日 (火曜日)	8					3/1/1
1号 (93号)	1935年1月1日 (火曜日)	8					3/2/1
2号 (94号)	1935年1月7日 (月曜日)	8					3/2/1

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

3号 (95号)	1935年1月14日 (月曜日)	9						3/2/1
4号 (96号)	1935年1月21日 (月曜日)	9						3/2/1
5号 (97号)	1935年2月28日 (土曜日)	9						3/2/1
6号 (98号)	1935年3月9日 (土曜日)	10						3/2/1
7号 (99号)	1935年3月16日 (土曜日)	10						3/2/1
8号 (100号)	1935年3月26日 (火曜日)	10						3/2/1
9号 (101号)	1935年4月6日 (火曜日)	8						3/2/1
10号 (102号)	1935年4月16日 (火曜日)	4						
11号 (103号)	1935年4月28日 (日曜日)	0						
12号 (104号)	1935年5月9日 (水曜日)	0						
13号 (105号)	1935年5月19日 (日曜日)	0						
14号 (106号)	1935年5月25日 (土曜日)	0						
15号 (107号)	1935年6月2日 (土曜日)	0						
16号 (108号)	1935年6月18日 (土曜日)	0						
17-18号 (109-10号)	1935年6月29日 (土曜日)	0						
19-20号 (111-2号)	1935年7月19日 (金曜日)	0						
21-22号 (113-4号)	1935年8月5日 (月曜日)	0						
23号 (115号)	1935年8月17日 (土曜日)	0						
24-25号 (116-17号)	1935年9月8日 (日曜日)	0						
26号 (118号)	1935年9月27日 (金曜日)	0						
27号 (119号)	1935年10月10日 (木曜日)	0						
28号 (120号)	1935年10月22日 (火曜日)	0						
29号 (121号)	1935年10月29日 (火曜日)	0						

30号 (122号)	1935年11月7日 (木曜日)	0						
31-32号 (123-4号)	1935年12月9日 (月曜日)	0						
33号 (125号)	1935年12月16日 (月曜日)	0						
1号 (126号)	1936年1月1日 (水曜日)	1				○	○	
2号 (127号)	1936年1月7日 (火曜日)	1				○	○	
3号 (128号)	1936年1月19日 (日曜日)	6				○	○	
4号 (129号)	1936年1月26日 (日曜日)	3				○	○	
5号 (130号)	1936年2月9日 (日曜日)	7				○	○	
6号 (131号)	1936年2月16日 (日曜日)	7				○	○	
7号 (132号)	1936年3月29日 (日曜日)	8	○			○	○	
8号 (133号)	1936年4月6日 (日曜日)	5	○			○	○	
9号 (134号)	1936年4月12日 (日曜日)	2	○			○	○	
10号 (135号)	1936年4月19日 (日曜日)	4	○			○	○	
11号 (136号)	1936年4月26日 (日曜日)	4	○			○	○	
12号 (137号)	1936年5月3日 (日曜日)	11	○			○	○	
13号 (138号)	1936年5月10日 (日曜日)	8	○			○	○	
14号 (138号)	1936年5月17日 (日曜日)	6	○			○	○	
15号 (139号)	1936年5月24日 (日曜日)	6	○			○	○	
16号 (139号)	1936年5月31日 (日曜日)	5	○			○	○	
17号 (141号)	1936年6月7日 (日曜日)	3				○	○	
18号 (142号)	1936年6月14日 (日曜日)	7				○	○	
19号 (143号)	1936年6月21日 (日曜日)	8	○			○	○	
20号 (144号)	1936年6月28日 (日曜日)	7				○	○	
21号 (145号)	1936年7月5日 (日曜日)	7				○	○	
22号 (146号)	1936年7月12日 (日曜日)	4				○	○	

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

23号 (147号)	1936年7月19日 (日曜日)	6				○	○	
24号 (148号)	1936年7月26日 (日曜日)	10	○			○	○	
25号 (149号)	1936年8月2日 (日曜日)	1 (1面)				○		
26号 (150号)	1936年8月9日 (日曜日)	8				○		
27号 (151号)	1936年8月16日 (日曜日)	9				○		
28号 (152号)	1936年8月23日 (日曜日)	1 (2面)				○		
29号 (153号)	1936年8月30日 (日曜日)	8				○		
30号 (154号)	1936年9月6日 (日曜日)	6	○			○		
31号 (155号)	1936年9月13日 (日曜日)	5				○	○	
32号 (156号)	1936年9月20日 (日曜日)	3				○		
33号 (157号)	1936年9月27日 (日曜日)	4				○		
34号 (158号)	1936年10月4日 (日曜日)	8				○		
35号 (159号)	1936年10月11日 (日曜日)	3				○		
36号 (160号)	1936年10月18日 (日曜日)	8				○		
37号 (161号)	1936年10月25日 (日曜日)	8	○			○		
38号 (162号)	1936年11月1日 (日曜日)	5	○			○		
39号 (163号)	1936年11月8日 (日曜日)	1 (1面)				○		
40号 (164号)	1936年11月15日 (日曜日)	6	○			○		
41号 (165号)	1936年11月22日 (日曜日)	5	○			○		
42号 (166号)	1936年11月29日 (日曜日)	4	○			○		
43号 (167号)	1936年12月6日 (日曜日)	6	○			○		
44号 (168号)	1936年12月13日 (日曜日)	2				○		
45号 (169号)	1936年12月20日 (日曜日)	10	○			○		
46号 (170号)	1936年12月27日 (日曜日)	10				○		
1号 (171号)	1937年1月3日 (日曜日)	7	○			○		

2号 (172号)	1937年1月10日 (日曜日)	1 (2面)				○		
3号 (173号)	1937年1月17日 (日曜日)	9	○			○		
4号 (174号)	1937年1月24日 (日曜日)	5				○		
5号 (175号)	1937年1月31日 (日曜日)	1 (1面)				○		
6号 (176号)	1937年2月7日 (日曜日)	6				○		
7号 (177号)	1937年2月14日 (日曜日)	1 (1面)				○		
8号 (178号)	1937年2月21日 (日曜日)	8	○			○		
10号 (180号)	1937年3月7日 (日曜日)	5				○		
11号 (181号)	1937年3月14日 (日曜日)	10	○			○		
12号 (182号)	1937年3月21日 (日曜日)	1 (4面)				○		
14号 (184号)	1937年4月4日 (日曜日)	7	○			○		
15号 (185号)	1937年4月11日 (日曜日)	8	○			○		
16号 (186号)	1937年4月18日 (日曜日)	2 (2面)				○		
17号 (187号)	1937年4月24日 (日曜日)	1 (2面)				○		
18号 (188号)	1937年5月2日 (日曜日)	8	○			○		
19号 (189号)	1937年5月9日 (日曜日)	1				○		
20号 (190号)	1937年5月16日 (日曜日)	3	○			○		
21号 (191号)	1937年5月23日 (日曜日)	6	○			○		
23号 (193号)	1937年6月6日 (日曜日)	7	○			○		
24号 (194号)	1937年6月13日 (日曜日)	2 (2面)	○			○		
25号 (195号)	1937年6月20日 (日曜日)	3	○			○		
26号 (196号)	1937年6月27日 (日曜日)	5	○			○		
27号 (197号)	1937年7月4日 (日曜日)	4	○			○		
28号 (198号)	1937年7月11日 (日曜日)	8	○			○		
29号 (199号)	1937年7月18日 (日曜日)	3				○		

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

30号 (200号)	1937年8月8日 (日曜日)	12	○			○	
			99	39	87	73	25

出典：『満洲通信』通算番号1号～200号（欠号：37号，38号，41号，179号，183号，192号）。
 ※商業広告数には，ウクライナ人居留民会と医療関係者は含めていない。また毎号，『満洲通信』の広告も掲載されているが含めていない。なお，商業広告は後半の面に掲載されることが多い。極端に少ない号は，後半のページが欠けている場合である。その号については商業広告数の2列目に現存するページ数を記載している。

3 C・D・タラセンコ商会

『満洲通信』で最も広告が多かったのは200号中99号に掲載したC・D・タラセンコ商会である。掲載されたタラセンコ商会の広告はロシア語であることからタラセンコの主言語であったと思われる。

経営者のセルゲイ・タラセンコに関しては，ピョートル・ポダルコの研究がある。ポダルコにV・F・モロゾフから提供された元ロシア解放軍（POA）の兵士で反共産主義的な放送局「ラジオ・リバティー」に勤めたオレグ・クラソフスキーの未発表の覚書によれば，タラセンコの経歴は以下のとおりである。セルゲイ・タラセンコ（1880～1981）はヘルソン州オデーサ郡ベリャコヴォ村出身で，日露開戦後，関東区要塞砲兵第6中隊の砲兵下士官となった。旅順降伏後，捕虜となり，大阪府堺市内の収容所に収容された。帰国後，商店を営むようになり，極東各地や満州，上海などにも進出し，革命後，ハルビンに移った。日本びいきで，1920年代に日本へも時々通い，パートナーや商売の相手を探したという。1930年代，成功した実業家であったがゆえに誘拐されたこともあり，ハルビンから家族とともに大連へ移った。1949年の中華人民共和国の設立後，彼は大連を去り，神戸でコスモポリタン製菓を営むV・F・モロゾフに嫁いだ娘オリガがいる日本に1958年頃移住した。その後，コスモポリタン製菓に93歳まで勤めた。1975年頃，日露戦争終了70周年を機に，クラソフスキーがタラセンコに旅順防衛戦についてインタビューを行った。1981年に101歳で死亡したタラセンコの墓は神戸市立外国人墓地にあり，その墓碑に「最後の旅順

兵士」が刻まれている⁽⁸⁾。

タラセンコ商会は、1930年から33年まで発行されたロシア語日刊新聞『哈爾濱日報』《Герольд Харбина》にも広告を掲載している。しかし、すくなくとも1931年3月からは広告が掲載されなくなった⁽⁹⁾。

1932年8月19日発行の『満洲通信』3号から継続して掲載されたタラセンコ商会の広告は、当初は『哈爾濱日報』とあまり変わらぬ内容であった。しかし、1934年3月3号から1934年4月23日までは、図8の4角がウクライナの国章トルィーズブ（三叉戟）を意識した意匠に変更されている。一方、タラセンコ商会の広告の掲載は1934年4月28日号を最後に一時中断した。これはボナペティ商店&カフェの広告掲載終了より半年も早い。この時期、ハルビンではウクライナ人居留民会設立に向けウクライナ・ナショナリズムが高まった時期であり、タラセンコ商会の広告にもトルィーズブ（三叉戟）が採用され、その意匠にも影響を与えた。その後、ウクライナ人社会内部の政治的対立から距離を置くため、民族意識の高い『満洲通信』への広告掲載を中断したとも考えられる。また、他の中断した理由として、この時期に大連での事業に本格的に進出した可能性がある。1932年から34年までの広告にはハルビンの所在地だけが、1936年に広告掲載が再開された際には、大連の「山縣通57番地」の住所も併記されるようになった。一方、同年に出版された『昭和11年版大連商工案内』の「大連商工名録」の飲食料品の区分に同住所の「山縣通57番地」に大連盛進商行（和泉祐二郎）が記載されており、タラセンコは日本直接統治下の関東州にあった大連では共同事業を営んでいた可能性がある⁽¹⁰⁾。なお、『満洲通信』への広告

(8) タラセンコの経歴については以下を参照した。ポダルコ「戦後に来日した亡命者の〈第三波〉」、『白系ロシア人と日本』, pp 130-133.

(9) Герольд Харбина: ежедневная газета на англ. и рус. яз. - Харбин, 1930-1933.
 (ロシア国立公共歴史図書館 Электронная библиотека ГПИБ России URL: <http://elib.shpl.ru/ru/nodes/15390-gerold-harbina-ezhednevnyaya-gazeta-na-angl-i-rus-yaz-harbin-1930-1933> 最終閲覧日：2020年6月19日)

(10) 大連商工会議所編『昭和11年度版大連商工案内』1936年, p. 56.

図6 『哈爾濱日報』のС・Д・タラセンコ商会の広告

出典：『哈爾濱日報』293号，1931年12月26日（金曜日）6面

再開後は、シンプルな元の意匠に戻っている。

1939年刊行の『哈爾濱商工名録』には、С・Д・タラセンコ商会は、広告とともに収録されている。広告には、大連のほか上海に支店があることが記された。業種は「洋酒・食料雑貨」、属性は「白系」とされている。⁽¹¹⁾

タラセンコは、満州国外交部の資料にも書かれた「民族的自覚に関しては殆

(11) 哈爾濱商工公会調査課編『康德6年度哈爾濱商工名録』「外露人之部：一，物品販売業」p. 5.

図7 С・Д・タラセンコ商会の最初の広告



出典：『満洲通信』3号，1932年8月19日4面。

図8 С・Д・タラセンコ商会の広告



出典：『満洲通信』9号（65号），1934年3月26日（土曜日）4面。

図9 広告再開後の最初の広告



『満洲通信』7 (132)号, 1936年3月29日4面.

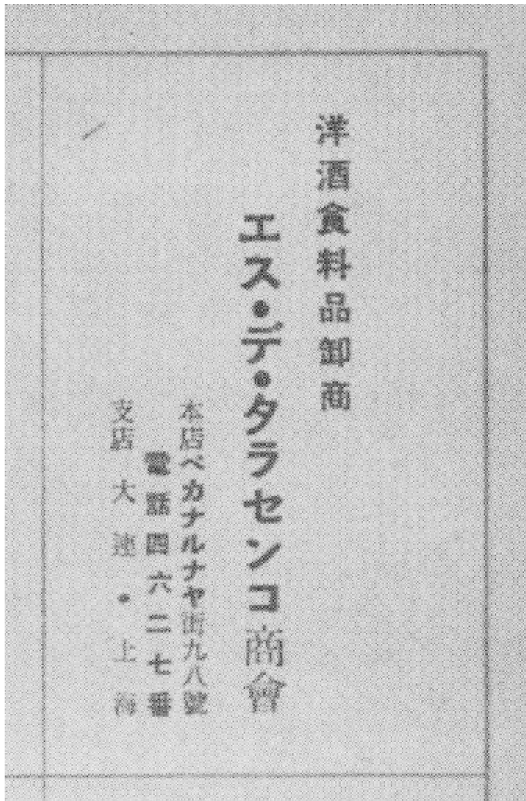
んど無関心の状態」のウクライナ人の一人であり、広告の掲載は、たんなる商業的な意図のみであったかもしれない。しかし、ロシア語新聞『哈爾濱日報』からウクライナ語新聞『満洲通信』への広告掲載の切り替えも見られ、また1936年1月の商業広告再開以後は最も早く掲載し、廃刊まで続いた業者でもあった。これからのことからタラセンコが『満洲通信』に対して好意的であったのは間違いない。

4 むすび

本稿の『満洲通信』の広告の分析からは、同紙がハルビンのウクライナ人の間でコミュニティー紙として機能する一方で、ウクライナ・ナショナリズムの高まりの中で揺れ動くウクライナ人社会や商工業者の実態が浮かび上がってきた。最後に、もう一度、本稿の要旨をまとめて終わりとしたい。

『満洲通信』の各号に掲載された広告数は1932年創刊直後こそ少ないものの、そこから安定的に広告が掲載されるようになったが、1935年4月あたりから急

図10 C・D・タラセンコ商会の日本語の広告



出典：哈爾濱商工公會編『哈爾濱商工名録』「外露人之部」
康徳6年（1939年）。

激に落ち込み、1936年4月にかけてはほぼゼロとなった。商業広告自体が全く掲載されていないので、『満洲通信』側の編集方針であったと推測される一方、ハルビンではウクライナ人居留民会設立を中心に、ウクライナ・ナショナルリズムが高まりを見せる時期であり同会設立の際は、不安定な運営が続いた。そのような政治状況が、ハルビンのウクライナ系商工業者や関係者から敬遠されたとも考えられる。

『満洲通信』に掲載された大半の広告がロシア語であった。H・ベールィは、

ハルビンのウクライナ人社会と商業活動

ハルビンでウクライナ独立派として知られていたが、自身の社交ダンス教室の広告ではロシアとの繋がりを強調していた。ときにハルビンのロシア人社会に批判的であった『満洲通信』において、商業広告において政治性はあまりなかったと考えられる。一方、ワイン店の事例ではウクライナの国章トルィーズブ（三叉戟）が商号に使用されており、ウクライナ人としての民族意識が強く感じられる業者も存在した。

医者や歯科医、薬局などの情報が掲載されていたことから、『満洲通信』はハルビンのウクライナ人の中でコミュニティー紙として機能していたことが分かる。また、1936年1月の商業広告再開後に映画広告が全号に掲載され娯楽性が高まり、また必要とされたことが窺える。

『満洲通信』に最も多くの広告を掲載したのがС・Д・Т. タラセンコ商会である。広告はロシア語であり、『満洲通信』への広告掲載はたんなる商業的な意図のみであったかもしれない。一方、商業広告再開後は最も早く広告を掲載した事業者でもあり、『満洲通信』に対して好意的であったのは間違いない。このようなタラセンコの立ち位置は、当時のハルビンのウクライナ人の間では一般的であったのかもしれない。